

筑波大学附属駒場中・高等学校 第43回教育研究会

講演会(15:00～16:30)

場所：7号館3階 オープンスペース

「中等教育におけるアクティブラーニング型授業の展開」

講演者：溝上慎一氏（京都大学高等教育研究開発推進センター/教育学研究科）

●溝上先生自己紹介、教育研究会感想

京都大学の溝上です。どうぞよろしくお願ひ致します。本日は2コマ目から授業を見せていただいて、協議会も参加させていただきました。今日は「中等教育におけるアクティブラーニング型授業の展開」というテーマで講演をするだけで、授業の話はしませんけれども、今日こちらに呼んでいただいて、大学で抱えている問題などいろいろ考えるところがありまして、冒頭に少しそういう話をしようと思います。

私は桐蔭学園で教育顧問として指導をしているので、そちらの話をビデオを見ながら話そうと思っていたのですが、多分その話よりも、こちらの学校の状況とすり合わせてお話をしたほうがいいかと思ひました。もし桐蔭学園のアクティブラーニングの取り組みについてビデオをご覧になっていない方は、YouTubeで「桐蔭学園」「アクティブラーニング」と打てば、2つのビデオが出てきますので、ぜひご覧下さい。

2015年の4月から、桐蔭学園全体でアクティブラーニング導入の指導をしていまして、本当に先生方がよく頑張ってくれました。先週アクティブラーニングの公開研究会というのをやってきたところですけども、全国からは500から600人くらいの方が来ていただいて、非常に大きな会を盛況に終えることができました。いろいろと課題はありますが、アクティブラーニングの推進という意味ではかなり上手くやれているかと思ひます。日本の新しい教育のモデルになるよう、学園を変えていくよう頑張ろうと、先生たちと心を合わせて取り組んでいます。

今日は筑駒の話をしたほうがいいと思ひますので、雑感を最初の15分くらい、後ろのデータも前に持ってきて、併せてお話しします。まず、授業は1つしかお見せいただいておりますけれども、化学の梶山先生の授業を見せていただきました。まず私の第一印象は、京大生の入学期の雰囲気に似ているなというものです。つまり、みなさんご承知のとおり、筑駒は1学年160人いる中、100人から120人程度、恐ろしい数字ですけども、ほとんどの人が東大に行く、全国の代表たる進学校ですね。そういうところで学ぶ生徒たちの顔、姿、雰囲気、教室の雰囲気なんかは、本当に京大生あるいはそれに近い大学のものに似ています。京大の高校版だという感じで見ていました。お聞きするだけでも、自由な学校の雰囲気とか、生徒たちがのびのびとやっている姿、そういうものを感じ取れました。

筑駒ほどではありませんけれども、私も高校のときは大阪の進学校で育ちまして、そこでも自由ということは標榜されていました。京大も自由な学風と言ひますけれども、別に昔の大学はそれなりにどこも自由だったわけで、自由の意味というのは色々あるかもしれ

ません。進学校の学校、大学なんかは、そううるさく規則とか取らずに縛らずに、生徒たちを本当に信頼して、色々自由にやらせていたことというのは、今も昔もそれなりにあるかと思います。大学のほうはかなり規制が厳しくなっていて、授業での単位や成績などのことはもちろんのこと、日夜いつも警備員の人が巡回していたりもします。年に何回かは新聞に載るような事件が起こって、それは学校の責任だと社会やステイクホルダーに言われて、建物も夕方になったら全部セキュリティロックが掛かって、学生たちは校内に残って自由に勉強することもできなくなっています。それでも、自由の雰囲気というのは残っています。この学校にもあるのだなと今日はしみじみと感じているところです。

他方で、筑駒はいいよね、という話だけでは、今日みなさん全国から集まっていたのに勉強にならないかと思います。授業は1コマしか見せていただいているんですが、緩利誠先生という昭和女子大学で筑駒に入って研究されている先生から、これまでの筑駒の状況をいろいろかがって、「それは京大（あるいは大学）と一緒にじゃないか」と思うところがありましたので、その話をしたいと思います。

#### ●大学の現状と教育改革

いい大学に結構生徒を入れている進学校の雰囲気を見て、本当にこれでいいと単純に思ってしまうのであれば、今の学習指導要領改訂やAL型授業の改革はいらないと思います。そう単純な話じゃないんですね。

問題は大きく2つあります。1つは、確かにクラス全体の生徒たちの雰囲気は、梶山先生の授業しか見ておりませんが、とてもいいものでした。が、いい大学に行く学生がみんな本当にこんな感じでやっていたら、トップの大学は改革をしないと思います。

実際、大学での教育改革が叫ばれているわけですね。それは、一言で言えば、出口がしんどいんですよ。いい会社とか、どこかに就職できるという話だけで言えば、そんなに問題はありません。2008年のリーマンショックの後、旧帝大の学生でも就職できない人とか第1志望でまったく決まらない人が3~4割いたとかそんなことはあったにせよ、今は超売り手市場ですので、会社を選ばなければ就職はできています。問題は、就職した後どうなっているかです。今でも七五三の現象はしっかり残っています。つまり、中学卒業だと3年以内に7割の人が辞める、高校卒業で5割の人が辞める、大学卒業で3割の人が辞める。これは大学の出口でいくら超売り手市場になっても残っています。昔のように、いい大学の名前だけで取ってくれるということは、これだけの売り手市場の中でもなくなっています。落ちる（べき）人は旧帝大卒でも落ちている。大学の名前だけでは通らない。ただいい大学を出たというだけでは企業の人には採らないし、理系なんかは研究室の推薦も機能なくなっています。自由マーケットの中で、できる学生は自分たちで会社を選んで入っていく。教授の権威なんかには頼らない。これが今ある程度確立しています。そういうところに乗っていけない、あるいはそういうところで勝ち進んでいけない学生が、教授の名前と研究室のコネを頼って、推薦を受けて、落とされてくる。企業の人が、昔は100%無条件

で採用と言っていたのを、だいたい2000年の半ばくらいから、やはりちょっと今一つだと。こういう感じで、必ずしも教授推薦が効かなくなっているわけです。

他方で、七五三の現象は残っていますけれども、3割で済むなら話はまだ簡単で、これが20代の終わりくらいまで見てみると、4割から5割の人が離転職します。そして離転職すると、たとえばポジションや年収だけで見ると、やはり条件は落ちます。20代ですから、引き抜きで離転職する人なんてそういない。結果、平均すると条件が悪くなるという理解になります。他方で、条件が悪くなるから離転職しないためにキャリア教育をする、という話もナンセンスで、今は本当に離転職がふつうの現象になっていることを私たちは理解しないといけないんだと思います。いい学生が、本当にいい会社に決まったと思って喜んでいて、入ってみたら、ブラック企業だったということもあります。ブラック企業って分からないんですよ。学生時代は本当に良かったんですけども、もう死ぬか働き続けるかどっちかしかない、もう辞めないと命が危ない、そういうところで辞めると条件が悪くなっていきます。ではその学生が悪いのか。そんな話ではないですよ。

あとはもう1つ、会社とかに決まったあとは、大学名は関係ありません。入ってしまったら、もうそういうのはフラットですね。仕事ができるかできないかですよ。実際私もいろんなデータを持っていますけれども、たとえば20代の終わりから30代の半ばくらいの人を、出身大学を眺めながらずっと見ています、その職場での働き方や年収を。そういう分析をしても、偏差値でまとめて60以上とかは、50台や40台と比べて差は出てきません。出てくるのは、卒業時に、どれくらい大きい企業に、どれくらいの割合で決まるかです。ここは結構効いてきます。だから「いい大学に入ったら、大きい会社に入る可能性が高い」とは言えますけれども、中に入ってから、この人いいなあという人を見ていった場合、必ずしも「いい大学」の人が集まっているわけではありません。この大学を出てこんな年収、こんな働き方になっているの？という人が少なからずいます。残念な話です。

緩利先生から聞いた2つのことが、私がこの話をしようと思ったきっかけでした。1つは、1学年160人のいろんな人がいて、やっぱりいい生徒たちが集まって、授業の中での議論がそんなに激しくなくても、たとえば文化祭とか、クラスの取り組みとか、課題研究もありますね。そういう中で、生徒たちのいい取り組み、いい議論があつて、いい思考が生まれているんだと思います。先生たちの深いまなざしを学習に込めていって、生徒たちがいい感じで学び合っているというのがあるだろうというのが容易に想像できます。

緩利先生から聞いたなかでおもしろかったのは、東大に入った筑駒の卒業生にインタビューをしたという話です。本当のアクティブラーニングの実践からはまだまだかもしませんが、旧帝大クラスでこんなにやっている大学は他にはなくて、よくやっている取り組みだと思います。駒場ではアクティブラーニングを結構やっていますね。そういうところで、ほかの学校から3000人というといろんな学校から進学して来ますね。そういう人たちとグループワークとか議論をすると、「面白くない」と言うそうです。ここだと思っんですよ。つまり、6年間、目的とか、学校の文化に染まった生徒たちが、本当にお互いをよく

知っていて、議論をする。そこで面白いと感じる。そういったことが一生続くんだったら、それでいいのですが、3000人いろんな学校から集まってきて、そしてお互い知らない状況から、一緒に議論をしましょう、一緒に課題に取り組みましょうということになるわけです。そのときに、一緒にやろうといってもあんまり何も出してくれない学生がいますよね。そういう学生がいて、大学では非常に問題になっています。すごくやる学生と、組みの弱い学生、あるいはそこに関わりたくないという学生がいます。そうは言ってもちゃんとグループワークをさせていく、あるいはアクティブラーニングの1つの形をつくるということが、授業者としては求められます。そういう学生たちが集まって、グループワークをやっていくという現実が社会にもあるということです。おとなしくて、言わせたら出てくるけれども、言わせなかったらずっと黙っているという人も含めて、作業をしないといけない。そういう人たちと出会っていくわけですね、卒業後に。そのときに、上手くそういう人たちの考えを引き出しながら、あるいは出ないんだったら出させてやろうということの思いながら、そこを乗り越えていってくれると、多分大学以降つながっていくんだと思います。もちろんそういうことができる学生もいると思います。でも、それではおもしろくないと、すねてしまう学生もいると思います。レベルの高いコメントかもしれませんが、筑駒ならここまで考えてほしいと期待してのコメントです。

組みの弱い、組みに関わりたくない学生が、大学でのアクティブラーニングやグループワークにとどまらず、卒業して仕事をするようになって、そういう姿を見せていくんじゃないかという仮説、データを集めています。今のところ、ある程度そういう結果が出てきます。つまり簡単な話、高校生のときにグループワークをしなかった、あるいはそういうものを嫌がった生徒が、大学に入ってやるのかと。やらないですよ。高校のときにできなかった、しなかった生徒が、担任も、注意してくれる先生もない大学の中でやるわけがない。そして大学でやらなかった生徒が、将来仕事をするようになって、仕事だからといってやれるようになるんだったら、苦労しないわけですね。

だから、この学校の中での組みは非常にいいと思いますが、卒業生のデータを取ってほしいと思うんです。卒業生がタフにいろいろなそういう状況乗り越えてくというのが示されてはじめて、筑駒の教育というのはいいんだなということになるんだと思います。160人のいい集団の中で育っていくことはあると思います。それに加えて、タフネスが育ってるかということコメントしているのです。それは卒業生で見ていかないとなかなか見えない。データでうまく出なかったら、そこが課題だとして、中高の組みにフィードバックすれば良いのです、いろいろ見えてくるはず。そして、学校の組みが1段上に上がっていくのだと思います。

今は、いい大学に何人入れたかということだけで進んでいます、多分近い将来、大学に入れたあとに自分たちの卒業生がどれくらい大学でやっているのか、というデータを見せないといけない時期が来ると思います。桐蔭学園ではこの準備を始めています。大学では、就職して何人決まりましたと、そこまでしか今は見せていませんが、大学も近い将来、

入学時から卒業時までの4年間のデータをつないで、どういう学生がいい形で最初の適応期を迎え、そして4年間学び成長し、いい形で卒業していくか、卒業して3～5年の初期キャリアをどう過ごしているのかを見せる方向で作業が進んでいます。データを見ながら教育改善をしていく、こういう流れに入っています。高校もこの話が他人事ではなくなる時期が、何年か先にはやってくると思います。今はカリキュラムマネジメントという話が出てきているのに、アセスメントの話はあまりありませんよね。マネジメントをしたら、そのマネジメントの成果がどこかで求められます。今回の学習指導要領改訂ではここまで出てこないと思いますけれども、いずれは出てこないはずがないと思っています。

### ●アクティブラーニングとは？

もうひとつ、アクティブラーニングは何か、という話についてです。アクティブラーニングはこういうものだ、というのではないんだと思います。むしろこういう言い方をしていかなければいけないと思います。後で申し上げますが、アクティブラーニングというのは、基本的には書いて、話して、発表して、という、アウトプットの活動ですね。これを入れていくことです。インプット、あるいは頭の中、個人の中だけで理解するというのではなくて、他者や集団を通して自分の理解を表現する、あるいは、同じ課題に取り組んで、お互いに自分の理解や考えを出し合う、すり合わせて問題解決する。そういう意味では、活動をやっているだけで OK とか、講義一辺倒を超えていればアクティブラーニングだと、こういう話は陳腐なものです。表現される中身とか、表現の仕方とか、文科省的に言えば対話とか協働性ですね。この部分をしっかりとやっていく。そういうものだと思います。

対話とか協働性の部分、これは社会の中でもあって、それを学校教育の中に入れていこうということです。いろいろ発問をして、生徒がこそこそと言って、それを拾って、そうだよ、というような授業がある。それは生徒たちの力強い能力に支えられていて、さすが筑駒という感じもあったんです。これは、トップ大学、進学校ではよく見られます。緩利先生から話を聞いていいなと思ったのは、このぼそつとある生徒が言ったことに、ほかの生徒が飛びついて、予想していなかった深い思考や議論に発展していくことがあることです。さすがだと。よくそこで呟いたなど。そういうのがありますよね。進学校の先生は多かれ少なかれ経験していると思います。京大でも、そういうのに支えられています。そういう部分はぜひ残したいんですが、他方で、その話に一体何人ついていっているんだということです。誰かがぼそつと言って、深い議論に誰かがつなげていって、「全体」として盛り上がっていくときに、「全体」というのは40人いたらどれくらいの生徒を言っているんだということです。それは多分40人いて、10人くらいいたら全体としてすごく盛り上がりますが、30人は大丈夫かと。その時間をどのように過ごしているんだということがあります。その30人が、勉強を頑張って東大や京大に入っていくときに、そこでその人たちはどうなっているのか、ちゃんと大学で発言できるようになっているのか。ここなんですよね。

### ●中間層とアクティブラーニング

だから、問題は中間層です。つぶやいて深い思考・議論で盛り上がるトップ層だけで満足してはいけないのです。

私たちはデータを取ることによって、中間層の状況がかなり見えるようになりました。この中間層は授業に出ます。しかし、自主的には勉強しません。自分で本を読んだり、自分で問を出したり課題探究したりもしません。しかし、授業外学習時間は長い。これはなぜかというと、自分だけではやらないんだけど、授業に出ていくという能動性はあるんですね。そして、この授業はしんどい、課題もある、宿題も出る、みんなと議論しないといけない、しかし頑張ってる。そうした枠にはまって発揮する主体性はあるわけです。私たちのイメージする中間上位層です。ということは、授業をちゃんと作ってやらないと、この手の生徒たちは伸びないのです。手取り足取りという意味ではなく、その手の生徒がしっかり伸びる授業をやり、育てることが重要だと思います。

### ●トランジション・キャリア教育

これは必ずしもアクティブラーニングと関係ありませんけれども、アクティブラーニングを通してトランジションという話をしていくと、キャリアという話になります。つまり、なぜ大学に行くのか、大学に行って自分は何を学ぶのかと。高校のときにキャリア教育が十分やれたかやれてないかというのは、高校生を見ていても分からないなということを、ここ5、6年ずっと高校のキャリア教育を見ながら思うようになりました。大学に入ったら、どうして自分は大学に行くのかとか、どうしてこの学部なのか、将来どんな仕事に就きたいのか、高校生バージョンでいいので考えて大学に進学してほしい。ただ数学や理科が得意だから理学部とか農学部とかではなく、それも大事なんだけど、もう少しほしい。それがあからこそ、大学に入ってから勉強する、本を読むわけですよ。20年間京大生を見ていて思ってきたことは、良い学生というのは、今日リクエストいただいている1本目なんですけれども、やることをちゃんとやるんだけど、自分で将来に向けて大事だと思うこともやっている。与えられなくても自分でつくっていく。その背後にキャリア意識があるのです。授業の取り方自体も違ってきます。履修行動といいますけれども、先ほど言ったように、力がつく科目は課題や宿題がけっこう出されてしんどいです。そういう科目は多くの場合選択科目です。半分以上の学生は、そういうしんどい科目を最初からパスします。それを履修してくる学生がいる。その学生たちに共通することは、キャリア意識が高いことです。しんどくても、この授業を受けて1歩でも2歩でも成長しようと。国際的な学習活動が高校でも豊かに展開されているのに、なぜ大学に入ってこんなに国際意識が弱い学生たちのデータばかりが出てくるのかと思います。留学したい学生は3割4割程度しかなくて、実際に留学した学生の割合はもっと低くて、とてもお知らせできる数字ではないのですが、本当に日本は大丈夫かと思ったりもします。

●筑駒からの2つの質問に答えて

今日は筑駒の先生たちから、大きく2つのリクエストをいただいております。ひとつは「大学の立場から見て優れた生徒とは」。これは実は今までの話の中で随分出しました。あとはデータを見ながら、ちょっと確認することにします。もう1つは、「どのような授業をすればアクティブラーニングと言えるのか」。校長先生の話にもありましたけれども、アクティブラーニングは昔からやっているよという話は結構あります。それでいいのですが、やっぱり何のために、という部分がかかなり違って、そこをちゃんと落とせるようになって来ると、アセスメントの話になってきます。どの学校においても、これまでやってきたようなアクティブラーニングでは十分ではない、ということがあると思います。

●「①大学の立場から見て優れた生徒とは」

まず1つ目、大学の立場から見た優れた生徒を見ていくためにはデータが必要です。今まで大学生のデータをずっと取ってきました。大学生といっても一言で言えないのは当然で、偏差値だけ見ても低いところから高いところまであります。専門分野もたくさんあります。いろんな大学があり、数は800程度あります。そういう大学生をそれぞれ分けながらも、全国的にこうだという状況が分かるようになってきたのは2007~2010年頃です。その頃から、私とか、同じような教授が全国に2人いて、全国のデータを集めてきました。例えば授業外学習時間ですね。偏差値に関係なく短い。日本の学生は授業だと勉強するけど、授業外ではやらない。そういうことがかなり分かってきました。他方で4年間追いかけていく追跡調査もおこなっていて、4年間でなかなか変わらないということも分かってきました。

例えばこのデータです。GPAという大学で使われる、昔だったら優・良・可・不可など付けていた成績を、0点から4点の形にして、平均点を出すものです。この生徒は例えばGPAが3.8とか、2.5とかのようになります。その点数によって、大学院の入学条件の1つにする、例えば3.5以上でないと入学はできない、奨学金の条件として3.2以上とか、そういう形でGPAを使います。このGPAの1年生の前期、だいたい夏が終わったくらいに前期の成績が出ます。そして3年生の前期、4年生で取っても同じなんですけれども、これを比べた相関プロットですね。これはある大学のデータで、私はここのIRを立ち上げるときに顧問をしましたので、こういうデータのお手伝いをしたんです。とにかく、当時の副学長から言われた私への課題は、大学に入ってできなかった学生がどうしたらできるようになるのか、その間に何があるのかというのをデータを集めて調べて欲しいということでした。調査をやり始めて、すぐこの問は解決されることが分かりました。なかなか変わらないということですね。変わる人はいるのですが、多くありません。つまり、だいたい大学1年生の前期くらいで、3年生終わり、4年生の成績がかかなり予想できるというわけです。

誤解の無いように1つ言っておきますと、大学生の19歳から22歳、23歳という年齢で、人は変わらないんだという話をしているわけではありません。変わると思います。ただ、総合大学というのはだいたい1000人規模の学生がいます。先生たちも学生の名前とか所属とかなんにも分からないで授業をします。確かに最後3、4年生でゼミがありますが、そこでface to faceで議論するようになって、先生は確かに名前と顔は分かっているけれども、その学生が日常で何をやっているかとか、この人がどんなふうに頑張ってきたかとか、将来をどう考えているかとか、多分そこを知っている先生はそんなに多くないですね。しかも、3、4年生の卒業前ではもう遅いということもあります。そう考えると、大学というのは、学生の非常に自立的な行動を前提とした教育課程になっているわけです。

ちょっと戻りますけれども、京都大学と河合塾で10年トランジション調査というのをやっています。2013年から全国の高校2年生を45000人、400校の学校に参加していただきました。この中にも参加していただいた学校があると思います。本当にありがとうございます。こういう学校と全国のいろいろな教育によって、この学習指導要領改訂、あるいはこの改革の元になるいろんな考えが出てきたといっても過言ではないと思います。こういうデータを集めて最後に仕上げをしなければいけないと考えた理由は簡単で、大学1年生の前期の状態が、結構4年間引っ張ってくるというのがある程度分かってきたからですね。ではどこからこの話はスタートしているのかと。だいたい高校生ですね。高校1年生とか2年生の前期とかは、いろいろ作っている時期なので、高校2年生の11月くらいで見てみよう。高校2年生の3月～高校3年生になったら、受験がありますので、だいぶ話は変わってきます。できるだけそういうものに影響を受けない時期として、できるだけ素の姿が現れる11月12月でデータを取ろう。そのデータと大学1年生の秋、11月12月、だいたい大学生もこの時期がひとつの適応完成期と言われます。前期はまだやっぱり動きまわります。適応過程ですから。でも、夏休みを明けて、ちゃんと心を入れ直している学生とか、あるいはそのまま流れている学生とか、その辺ははっきりしているので秋に取る。大学1年生の秋というのが学生を見ていく1つの時期だと思います。大きく離れたこの2つの時期をつないだときに、どれくらい関係があるのか、関心がありませんか。

この関係がもし見られるとするなら、これは大変なことですね。つまり、先生たちが高校2年生の秋くらいで、この生徒は勉強はできるけど、行事とかにあまり本気で参加していないとか、グループワークをやってもいつも1人でショボンとしているとか、あるいは議論はしていても声が小さいとか、色々な関わりを受け入れないとか、その学生は大学に入ってやれるようになるのかと。やらないということですね。そのまま行く確率が高い。行事なども決してバカにできない。行事に十分参加しない生徒は、今までであれば、あの人は勉強はできるかもしれないけど、こういうのは苦手で、とか、こういうのは好きじゃない人ということでOKというふうに思っていたかもしれません。違いますね。そこに参加していないことが、グループワークとか、いろんな人たちと共同で物事に取り組んでいくときに、ネガティブなインパクトを与えます。そういうことが結果として言えるという



ことですね。

ここで本を紹介します。本を買いたくないという人は、京都大学のホームページの中に報告書が PDF ファイルでありますのでご覧下さい。今から言う話は全部あります。ぜひダウンロードしてください。細かい話、分析の方法とか、データの特徴とかはそこを見ていただければと思います。

資質・能力というのは、文科省の施策で中心的なトピックとして上がっています。つまり社会に向けて、能力を育てなければいけないんだと。ここでは時間がないので、言葉だけ聞いてください。これは資質能力の4つの次元に分けて、例えば相手の話を聞くとか、異なる立場の人でもちゃんと耳を傾けるとか、他者に対するもの、それから社会とか文化に異なる文化とか異なる社会に関心を持つ、これは学力と相関が高いですね。それから、計画実行力と言って、日々のいろんな物事に計画的に取り組むとか、課題に忍耐強く取り組むとか、そういう課題に対しての行動力ですね。そして最後にコミュニケーション、リーダーシップ、これはアクティブラーニング、あるいは世の中で言うコラボレーションとか、そういうことです。この図が示しているものは何かというと、例えば高校2年生のときに低群だった人が、大学1年生の秋になって低群である確率は、この青なんですけれども、逆に、高校2年生のときに高群だった人が、大学1年生の秋になっても高群である対応なども書かれています。こういう感じでクロスしたわけですね。低群から低群、中群から中群、高群から高群、これを変化なしというように定義をします。これを見たときに、5割から6割の人が変化なしという結果です。例えば、低群の人が中群になるといった、いわゆる上昇群は2割しか認められませんでした。つまり、高校2年生の秋の能力が、大学の半分以上の学生の能力を説明するという結果ですね。これは私たちが持っていた予測に近いデータです。

高校2年生のときに、27項目を尋ねてその反応パターンをクラスター分析でタイプを抽出して、今河合塾に「学びみらい PASS」というのがありますね、そこに入れてもらって、このタイプが算出されるようになっています。これは「大学に入ってどれくらい生徒が伸びるか」というアセスメントテストです。何が特徴かということ、上の2つは、「勉学タイプ」「勉学そこそこタイプ」というのは、どちらも結構似ているんですけども、家庭学習をやる生徒です。そ平日2時間くらい、休日は平均3時間くらい。この生徒たちはほかにも特徴を持っていて、高校2年生の秋の時点で、将来のことを考えているとか、あるいは将来に向けてもう勉強を始めているとか、大学卒業後、自分はどのような職業とか、大人になるかをある程度考えている、こういう得点が高い生徒です。自己肯定感や対人関係も良好です。家庭学習がなされていても、キャリア意識が低い、対人関係が弱いと「行事不参加タイプ」になる可能性があります。まとめると、家庭学習をやって、将来のこともちゃんと考えて、その行動をちゃんと見せている、そういう生徒が勉学タイプ、勉学そこそこタイプになるわけです。この生徒たちは、進学校のいいお子さまたちに多い特徴だと言えます。この人たちの8割くらいは部活動をしています。だから、決して勉強だけの人たち

ではありません。そして、他方で部活動タイプに分類されてしまう人はどういう人なのかというと、家庭学習をやってない人たちです。部活動タイプは将来のことをあんまり考えていないという結果も出ています。

問題なのは下3つで、「行事不参加タイプ」「ゲーム傾向タイプ」「読書マンガ傾向タイプ」まあ読書と言ったらいいじゃないかと思われるかもしれませんが、ここはむしろ、漫画とか雑誌とか小説とかを読むことに、1週間の時間をほかのタイプの人たちと比べて長く費している人たちです。ほかのタイプは全く読書をしていないというようには思わないでください。そういうように分類されたときに、この3つはともしんどい傾向を見せています。共通するのは、行事不参加、1週間ゲームばかり、そしてマンガとか読書とか、つまり1人で過ごす時間が長いとか、いろんな人たちと一緒に過ごすことを嫌がる、苦手とする生徒たちです。彼らはキャリアも弱いです。行事不参加タイプは成績はけっこういいです。対人関係の能力と、将来へのキャリア志向とは成長の2要因です。将来を考え、かつ社会の人たちにも関心を持つという2つを持ち合わせる生徒は最高です。どちらかの人もあります。両方ない人、ここでの3タイプのような人もいます。いろんな人たちと関わるのが嫌であり、自分の将来も切ってしまう、と言えます。

「行事不参加タイプ」だと、彼らは行事は苦手であるというだけでは済まないわけです。世の中で、やっぱり頭がいいだけではダメなんです。いろんな人たちと一緒に取り組んだり、仲良くやっていったりできなければいけない。いい子ちゃんであれとかそんな話をしているわけではありません。ただ、人の話を聞いて、自分の考えも言って、嫌な人たちとも軽く流せるくらいの付き合いもできる、そういうことが求められているんです。

進学校は勉強タイプが多いということでしたが、さっきの全国の40000人のデータからですけれども、進学トップ校の生徒は「勉強タイプ」や「勉強そこそこタイプ」が多いといっても、「行事不参加タイプ」「読書傾向タイプ」「ゲーム傾向タイプ」も多いです。こういう人たちのなかには、受験期に頑張っているいい大学へ入って、大学側からすると訳分からんという状況になります。これは先ほど紹介した10年調査のPDFにあります。高校生の状況が大学にけっこう影響を及ぼしているのが見えてきたという話です。

まとめると、大学の立場から見て優れた生徒というのは、当然基礎的な知識、技能、学力の3要素で言えば1つ目、知識技能をしっかり習得すると。これはまあ当然ですよ。いくら対人関係が良くて、いくらコラボレーションができて、中身が空っぽとか、話が面白くない、ということになりますよね。それはバランスであって、個の能力と、協働の能力と、どっちも伸ばさないといけない。そういう話です。

学生の授業の受け方が2つに分かれます。1つは、自分で今まで学んできたこととつなげながら聞いている、あるいは分かりやすく言えばメモを取りながら聞いている学生です。他方で、ただ聞いて、面白かった、面白くなかった、ビデオを見せたら目を輝かせますけれども、終わったら途端に寝るとか。こういう学生の違いがあります。あるいはレポート、プレゼンテーションをさせる授業では、レポートでも、ただ字数を埋めて出す人と、自分

でいろいろ調べたり書き直したりして出す人と分かれてきます。プレゼンテーションなら、ただ 10 分の発表を与えられてやるだけの人と、そのプレゼンテーション資料に、自分が頑張ってきたことを 1 人でも多くの人に聞いてもらいたいと思って準備したり、精一杯練習して発表したりする人に分かれてきます。そんな 1 つ 1 つの局面での、主体的な取り組みが、後々いろんなところに効いてこないはずがないですよ。これが就職して、最初 3 年くらいの働き方に影響を及ぼすという仮説を持っています。この 45000 人調査をやる前に、企業人を対象に予備調査やっています、これは今年もやりました。個人の振り返りになるんですけども、大学時代にどのように授業とか学習に取り組んでいたかというのを聞きながら、職場の中で働いているか、あるいは年収はいくらだとか、そういうものとの関係を見て、この調査の基礎的なデータを集めています。そこにはやっぱり関連が見られます。だから、アクティブラーニングは昔なかったかもしれませんが、講義とかいろんなものの中で、主体的に取り組めた人と、ただただ宿題とかだけやっていた人と、やっぱり違うんだという話につながっていきます。

● 「②どのような授業をすればアクティブラーニングと言えるのか」

何をやればアクティブラーニング型の授業になるのかということですね。アクティブラーニングというのは、講義に加えて、書いて話して発表して、という、私はアクティブラーニング型授業と呼んでいますけれども、これは文科省が施策の文章で使う専門用語の「型」ではありません。文科省の定義は、特定の学習とか指導とか、そういうことに拘泥しない、という説明ですね。その話とはちょっと違います。私は、英語の **active learning** を、日本にカタカナで紹介する、その段階から取り組んでいます。2006 年から取り組んで、2010 年くらいから河合塾と一緒に全国に広めました。今さら **active learning** を「能動的学習」とか「主体的な学び」などと訳したのでは、おそらく多くの学校関係者には響かないだろうと思い、思い切ってカタカナにしました。多くの関係者に精一杯クエスチョン・マークを飛ばしてもらわないといけない。だから今日も筑駒からのリクエストで、結局「何がアクティブラーニングなのか」ということを問われたわけですよ。ありがたい。こういうふうに言ってくれて、今世の中がいろいろ変わってこうとしている。そしてみなさんもいろんなクエスチョン・マークが飛んでいると思います。これをただ「能動的学習」とか「主体的な学び」と訳していたら、「ああ、あれね、それは大事だよ。」で終わっていたと思います。

そして、今の学習指導要領改訂も、一番のテーマは高大接続です。高校と大学がこんなにつながらないといけない言われた時代は多分なかったと思います。でも、この話はどこから来ているか。この大学での初期の 1 年生の姿が、かなり小学校中学校高校の基礎に依存している。ここを国民全体が理解しないといけない。いわゆるいい大学に入っても将来うまくいっていない人はたくさんいるんです。そういうことを分かっても、それでもやはり大学受験が大事だと言いますか？という話です。もちろん、大事でないと言っているわ

けではありません。それが自己目的化してはいかんでしょう、という話です。

2010年からアクティブラーニングが河合塾の全国調査を機に草の根運動的に全国の大学に広まり、2012年には高等教育のいわゆる『質的転換答申』の中に施策用語として入ってきました。これが日本の、国レベルでのアクティブラーニングの最初の施策化です。そして2年後、2014年度ですね。前々文科大臣が、中教審に学習指導要領改訂に向けての諮問を出しました。この時点までは大学だけの取り組みだったんですが、それだけでもすごかったんですが、それが小学校から高校までの課題になって、今は日本全体がトランジションに向けての施策、その先に見ているのは当然受験ではない。受験も大事ですけれども、やっぱり将来力強い仕事、力強く社会を生きていく人に育ってほしいという願い。ここに、この言葉があるわけです。アクティブラーニングという言葉で、今は高校と大学がつながるんですよ。今まで学習指導要領のない大学と、高校がこんなに一緒に議論をするということにはなかったと思います。これが今はできるようになったんですよ。もちろんみなさんの中にはわからない部分があると思います。それがこれからの学習指導要領のページですね。現場での協力もあり、施策はだいたいひととおりに出揃いましたので、多分学習指導要領にちゃんと文言ができて、アクティブラーニングという言葉が残るか残らないかというところも1つポイントとしてあると思います。でも、答申までは残るでしょう。そういう意味では、今は精一杯大学での経験と、高校での経験と、そして間をつなぐようにして、この議論をどんどんしていくという段階です。

#### ●アクティブラーニングが真に目指すもの

私は「アクティブラーニング型授業」という用語を、2010年からずっと使っているんですね。アクティブラーニングといっても、全部の講義をひっくり返してアクティブラーニングだけにしていましょ、とは誰もいっていないわけです。海外の研究者もそんなことは言っていない。だから、講義もあっていいし、アクティブラーニングとのコンビネーションが重要だと。そういうことにしていけないと危惧して、この用語を当時作ったわけです。それを今も使い続けています。

結局何をやったらアクティブラーニング型の授業になるかと言ったら、講義を聞くということだけじゃなくて、書いて話して発表するというアウトプットですね。そういうものを入れていって、そこに協働というもの、特に他者とか集団というものが関わってくると。だから学び、学力というのは、決して個人の頭の中だけの話だけではなくて、いろんな人たちとの中で見せるその姿も学力なんですよ。それが「テストに出ないから関係ない」という学校とか先生方はまだまだいらっしゃいます。こういう文科省の施策が2014年から入ってくる前は、データを見せても、全国の多くの学校関係者は、私がこういう話をして何と言ったかという、「先生、分かるけれども入試が…」とか、「うちの学校はやっぱり受験が変わらないとこんなことはできないんです」ということを本当におっしゃって、私はボコボコにされてきたわけですが。私はそれをずっと聞きながら、こういう話を忍耐強く

繰り返してきました。つまり、一体何のために教育をやっているのだと。1人でも多くの生徒を仕事・社会に力強く育てて輩出したい、こういう願いがあって教育をやっているんじゃないんですかと。いい大学に何人入れたとか言って喜びたいなら、●●予備校と学校の名前を変えた方がいいんじゃないですか？と。大学も学生を一生懸命育てていこうとしています。すべての大学の先生がとか、そんなことは言いません。でも、大学全体のモードは学生主体で、学生が一体何ができてどう成長するか。大変な改革を続けています。今は最終段階です。アセスメントが出始めましたので。

### ●アクティブラーニング+深い学び

アクティブラーニングとは何かと言ったら、もちろんこの活動を入れていることです。そして活動入れたらそれでいいでしょという話は、もう今は言わなくていいですよ。文科省で1年間の議論を経て、本当は「主体的、協働的」だけでよかったのに、「深い学び」も入れましたね。昨年の論点整理では、「主体的、協働的な学び」という説明でした。学術的に定義してきた私の、あるいは海外のものと比べると、かなり文科省寄りの説明になっていますけれども、そんなことは小さなことで、ポイントが押さえられていればOKです。要は個人の主体性と、他者とか良い集団の協働性、そこに学びというものが求められている、これだけがちゃんと入っていればいいんですよ。だから私はOKと言ってきました。ところが、ここに「深い学び」が入ってきて、アクティブラーニングに深い学びなんか入れる人なんて、海外の学者にはいないんです。それを入れなければいけない。何があったのか？

論点整理を2015年8月に出したあと、1年間教科のワーキンググループで議論して、アクティブラーニングを各教科でどのように捉えるかと1年間審議した中で、これでは教科学力が落ちるという懸念が激しく出されたのだと思います。全国のあやしいアクティブラーニング騒動も一役買ったと思います。

みなさんが色々受けられている、全国で色々怪しい人たちがたくさんアクティブラーニング講座で説かれているものの中でも、どれも決定的に間違えたことは言っていないかもしれないけれども、「なぜ」というあたりは決定的にずれているものが多いように見えます。ここがないと、学習を深めるとか、単に思考力を上げるとか、そんな話にしかならないんです。そんなことだったらアクティブラーニングがなくなっても、先生たちが今までやってきたじゃないですか。まさに筑駒、私たちが今までやってきましたよ、そういう話にしかならない。でも、もっともっと大学や社会につないでいくような力というのが本当に育っているのかと。特に、表現をどんどんさせていったら、言葉遣いや、ちゃんと伝わるように喋っているのか、あるいは元気よくやっているのか、あたりの態度も問われてくるんです。そこをチェックしていかないと、大学や社会の中で力強く、いわゆる社会人になっていかないと。単にいいことを言えたとか、用語を暗記しているとか、そんなことだけじゃダメなんです。今まで問われなかったものを問うていくと。

そのときに、「外化」というのを私は強調しているんですけども、アクティブラーニングはあくまで傘概念（umbrella term）でありまして、例えばジグソー法とか、協同学習、PBL、LTD 話し合い学習法などいっぱいあります。技法や戦略というのは、200、300 とも言われています。しかし、その1つ1つが大事なのではなくて、教科とか専門分野とか、小学校、高校とかに対応しやすい技法というのがありますので、それは色々あっていいんですが、それらを貫く概念や理論が重要です。それがアクティブラーニングです。実際、ジグソー法だけをやりましょうというのが一番困って、それは教科とか先生の関心とかに応じて使われるべきだと思います。具体的な技法や戦略が先立っては危ない。重要なのは、講義でただ聞くだけの学習ではなくて、自分でアウトプットをして、自分が頭の中で何を考えているかということのをちゃんと出す。そして人に伝える。人の話を聞いて返す。この基本的なものをちゃんとやる学習。途中途中の話し方とか、声の大きさとか、そういったものも、資質・能力の育成ですから、できるようにしていく。そういうところにも、アセスメントの視点を向けていく。

資料を見ている方は分かると思います。『論点整理』の補足事項として、つまり、主体的、協働的というだけじゃダメなんで、うちの松下佳代先生という同僚の教授がいるんですけども、彼女はディープ・アクティブラーニングというのを 2015 年に本を出しました。私も一緒に書きましたけれども、この考え方があるんですよ。つまりアクティブラーニングが大事だからと言って、深い学びがいらないとは誰も言っていない。深い学びは学習内容の深さ、そういうものに関連してきます。中身が全然薄っぺらい議論にしかなくなっていないとか、それはダメなアクティブラーニングです。活動をやって、自分の頭の中にあるものを出して、出して、それで整理されていって、こういうこともあるぞと気づいていくような。そしてその内容も教師が設定する目標に一步でも近づくようなところに出ていく、そういうようになって、いいアクティブラーニングなんです。当たり前ですよ。そういうことをやっぱり目指そうということで、ディープ・アクティブラーニングという概念を作ったわけです。

2つ問題点を紹介します。アウトプットをやりながら、ちゃんと習得、活用、探究という学習プロセス、学びの過程の中で、深い学びを実現すると。こういうふうにして、ちゃんと深い学びにつなげなさいよという形の論点整理を1年前に示していたんですね。「課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学び、いわゆる〈アクティブラーニング〉」と。この文言が消えて、キーワードだけがそのまま残って、「主体的で、対話的で、深い学び」ということになりました。深い学びが入ってくるというのを聞いて、これは困ったなと、はじめ思いました。これはアクティブラーニングからかなり離れて、それは理想的な学びを全部放り込んで、何がアクティブか分からないという話になってしまう可能性がある。でも、まあ分かったと。それは良いとしましょう。しかし、もう1つの問題は、順番です。「深い学びで、対話的で主体的な学び」だと。これはダメだと思いました。つまり、深い学びは大事けれども、これを最初に持ってきたのでは、喜ぶのは教科の人だけです。ちゃん

と協働的な学びあたりをしっかりと入れて、その上で深くしていかないとダメなので、この順序は問題だと思いました。逆の順番じゃないかと。結果的には「主体的・対話的で深い学び」となりました

●アクティブラーニングのポイント①：個－協働－個の学習サイクル

結局何をやったらアクティブラーニングなのかという話は、いろんな説明の仕方があるんですが、2つだけ、私の方でしておきたい説明があります。

ひとつは、個－協働－個の学習サイクルですね。これを実現していくことです。例えば、講義をして、グループに分かれて、課題を与えてグループで議論するという授業は結構見ているんです。これで行くと、何が起こるか。例えば一部の人が一生懸命考えを出して、議論に参加していても、残りの2人は聞いているだけとか、あんまり考えていないということが起こるわけです。ここの話を冒頭にしたわけです。つまり、すごく頑張っている生徒たちの姿が全体に映って、今日はいい議論になっていたなと思うんですけども、そこに参加していない生徒は確実にいる。ぼーっと聞いていただけの生徒が、中学、高校、大学と上がって行って、やるようになるのかと。やらないですよ。やらないから、じゃあ全員が何かしら自分の考えとか、理解をちゃんとアウトプットしていくシステムをちゃんと作らないといけない。だから、まず最初に個の時間を作ると。つまり、ワークシートをちゃんと作って、まず自分で考えとか、理解を出す。そして、それをシェアする形で、リーダーや司会を中心にみんなを出していく。そして、1人で考えていなかったものが色々出てきて、4人で全体として何かしら新しいものが生まれる、これが理想ですよ。そこに持っていくためのグループですから。研究の世界とか、企業のプロジェクトでもあるんですけども、1人で考えていても分からないことっていっぱいあります。そういうときは、なんでもいいからとにかく何かを出そうと。私もすごくしんどい日々の中で、短い時間の中で考えなきゃいけないことが山ほどあって、そんなときにちょっと何にも向かわないでただだと喋っている中で、何かにつながっていくことってあるんですよ。そういうことって先生方にもありますよね。そういうものの生徒版を作りたいんです。そして、みんな喋っていて、自分だけでは見えなかったところを、4人を通して何か見えてくるという状況に向かわせたい。向かわせたいという期待だけあって、それがしっかり結果になっているかどうか分からないというのはダメなので、そこはワークシートの作り方かなと思います。これは全国の先生たちの取り組みを見てみると、ワークシートに個の表現を書く欄があって、自分の表現を書く。その後に、グループで話した後気づいたことを2点書きなさいとか。そういうようになっていたら、生徒たちは無理やりにでも4人で議論して新しいことを見つけないといけない、というふうになる。これくらいのことがいっぱい重なって、思考力が深まっていくと。そういうことを、個－協働－個の学習サイクル、あるいは学習の視点と呼んでいます。最後はやっぱり個の視点に戻して、自分が何を学んだかというリフレクションですね。これをしっかりとやっていくと。

●アクティブラーニングのポイント②：教師はファシリテーターだけではない

ここで教師が果たす役割というのもあると思います。つまり、アクティブラーニング型の授業を進めていくと、教師はファシリテーターなんですねという議論が出てきます。私は Yes & No だと思っています。それは生徒たちが主体になって、考えが出てくるようにファシリテートするんだから、ファシリテーターとしての役割はありますよ。だからといって、教科とか知の専門家である教師の役割を捨てていいんですかと。それを捨てていいんだったら、別に先生たちがやらなくていいですよ。民間の業者を呼んできて、アクティブラーニングの時間とかを作ったらいいですよ。そうじゃないですよ。出てきた内容に、色々言える先生たちがすごく大事なんです。生徒が色々出してきて、その中にいい発言、いい考えがあると思います。100 個あったら 80 から 90 個くらい、すごく小さい、個人の生徒たちの経験で、なんてことないと思うものだと思いますけれども、残り 10 個は、そんなところにつながるのか！と、そういうものがあると思うんですよ。生徒は自分の頭の中にあることを出しているだけなので、それがどれくらいいいことなのか、小さなことなのか、何も分かっていません。だからそこをまとめて、みんなで到達した基本的なところと、〇〇くん、〇〇さんのこういう考えってこういう話につながるんだよ、すごいよね、と位置づけてやるということが教師に求められると思います。時間の問題があるので、あんまりやりすぎてはいけません、多少これがないと、生徒は言いますよ。先生はズルしていると。何も教えてくれないと。私もそうだと思います。つまり、生徒たちに頑張れよ、と言って課題を出して、よし君たちは頑張ったね、じゃあさようならというのはダメなんです。私たちはどういうことを求められるかということ、生徒たちが出した素朴な話が、どれくらい学術的なフロントに近い話なのかということ、繋げていくわけです。

●アクティブラーニングのポイント③：表現、アウトプット、外化

アクティブラーニングについても一つ、これがアクティブラーニングだというポイントは、表現、アウトプットですね。頭の中にあるものを精一杯出していく。やっぱり、高校や中学というのは「問題」が与えられますので、正解により効率的に、より速く、無駄なくたどり着くことが、入試には必要なのかもしれません、しかし、学習の過程、作りこんでいく時期は、理想を言えばいっぱい遊ばないといけません。遊ぶというのは、頭の中にある、問題や問いに関して思うことを片っ端から出していくということです。そしてそれを出した後、大事なものを繋いでいく。筋にしていく。その筋は、教師が説明したような綺麗な、1つの答えに向かって美しい筋には絶対ならない。実際、問題や問いを与えられたら、たくさん関連する、だけれども正解には使わないいろんな考え、知識というのがあるわけです。それを出させたいと。他者や集団、先生のいい介入によって、それがなかったら思い出せなかった、あるいは浮かばなかったことも出てきます。これはいい授業、いい学習のプロセスだと思います。他者の役割というのはとても大事で、他者がダメだっ



たら絶対にいい議論にならないんだけど、そのいい他者といい議論を作っていくための授業とか、クラスとか、学校づくりとか、こういうことを考えていかないといけない。そういうものが色々出てきて、寄り道しながら、たくさん出てきて、これはこうつながるなとなったり、こういうものがあつたらこういうものがあるよねと。これは発見とかイノベーションの構図ですよ。

だからアクティブラーニングというのは、概念的に言うと「外化」なんだと思います。私はそれを「認知プロセスの外化」と呼んでいます。「内化」「外化」という言葉で最近ではアクティブラーニングを説明しなおそうとする学者も出てきています。生徒たちの表現を見ていると、これに関係しているんだけど、冗長になるからやめてこっちに行こうということもありますよね。そういう力も育てていると。だから表現、アウトプットって簡単に言いますが、すごく本質的な成長を作っていくもので、これを出そうとする中で、生きる力とか、課題、世界、自己に向かっていくモチベーションが生まれてくるわけです。今ある形よりも二歩でも、三歩でも前に進むということだと思います。本気でこういうことをやれば。

ひとつの答えに向かわなくても、途中途中の正しい知識を使ってステップを踏んで、いくつかの解に分かれるよね、というのが、探究的な学習につながる。入試とか、社会ではこんな話ばかりですので、その一部を体験させていこうという話になって、アクティブラーニングが単に活動、アウトプット、外化の話だけじゃなくて、こういう社会につながる内容の話も絡んで、今展開しているんだと思います。ここで終えたいと思います。ご清聴ありがとうございました。